





病害虫発生予察情報予報第 8 号

佐賀県農業技術防除センター

I. 予報の概要および各作物の特記事項

作物名	病害虫名 ^{注1)}	11月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫 (抜粋)
		平年比	前年比		
オオムギ	網斑病	少	少	137~138	 シロトビムシ類による被害
	縞萎縮病	やや少	並	141~142	
	斑葉病	並	並	136	
コムギ	シロトビムシ類	やや少	並	143	
	縞萎縮病	並	並	141~142	
1. シロトビムシ類 常発圃場（コムギ、ハダカムギ等）では、種子粉衣または塗沫処理を徹底する。					
麦全般	1. 種子伝染性病害（オオムギ網斑病、麦類裸黒穂病及びオオムギ斑葉病） 健全種子を使用するとともに、種子消毒を徹底する（防除のてびき p135~136 参照）。				
大豆	1. 紫斑病 適期収穫を行い、乾燥施設へ速やかに搬入する。				
タマネギ	べと病	やや多	並	266~268	 ネギアザミウマ
	ポトリチス葉枯症	並	並	269	
	ネギアザミウマ	並	並	276~277	
	1. べと病 本圃での発生を抑えるため、苗床から防除を徹底する（平成29年10月6日付け病害虫対策資料第11号を参照） 2. 苗床での細菌性病害、疫病等 一部の苗床でこれら病害の発生がみられる。病原菌を確認し、罹病株の抜き取りや登録農薬の散布など適切な対策を行う。				
イチゴ(本圃)	ハダニ類	並	やや多	214~215	 ハダニ類
	うどんこ病	やや少	並	204~206	
	アブラムシ類	並	並	219~220	
	1. ハダニ類 一部の圃場で発生が認められる。発生初期に防除を徹底する。また、天敵を利用する圃場では有効薬剤によりハダニの密度を0頭レベルに抑えた後に、天敵（カブリダニ類）を放飼する。 2. うどんこ病 一部の圃場で発生が認められる。約10~14日間隔の薬剤防除と硫黄粒剤のくん煙処理を組み合わせで防除する。				

作物名	病害虫名 ^{注1)}	11月の予想発生量 ^{注2)}		病害虫防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病害虫 (抜粋)
		平年比	前年比		
キュウリ	べと病	やや少	やや少	184~185	 黄化えそ病
	うどんこ類	やや少	やや多	182~183	
	褐斑病	やや少	並	187~188	
	アザミウマ類	並	やや多	196	
	コナジラミ類	やや少	やや少	195~196	
1. ミナミキイロアザミウマ、タバココナジラミ、黄化えそ病、退緑黄化病 ウイルス病の罹病株を認めた場合は、早急に処分するとともに、媒介虫の薬剤防除を徹底する。					
トマト	コナジラミ類	並	並	157~159 234~236	
	1. ウイルス病媒介虫（タバココナジラミ、アザミウマ類） ウイルス病の罹病株を認めた場合は、早急に除去処分するとともに、媒介虫の薬剤防除を徹底する。				
ナス	アザミウマ類	並	並	160~165 247~248	 ミナミキイロアザミウマ
	コナジラミ類	並	やや多	157~159 248~249	
1. すずかび病 本病の発生を認めた場合、ダコニール1000（TPN水和剤）を散布し、約1週間後にベルコートフロアブル（イミノクタジンアルベシル酸塩水和剤）を散布する。これを約1ヶ月間隔で実施することで本病の発生を低く抑える。					
アスパラガス	1. アザミウマ類・ハダニ類 本作で発生した虫が次作の発生源となるので、収穫終了後も茎葉刈り取りまで薬剤防除を定期的に行う。				
	2. 褐斑病、斑点病、茎枯病 発病茎葉が次作の伝染源となるため、収穫終了後も茎葉刈り取りまで薬剤防除を定期的に行う。				

作物名	病虫害名 ^{注1)}	11月の予想発生量 ^{注2)}		病虫害防除のてびきの記載頁 ^{注3)}	予報対象の病虫害 (抜粋)
		平年比	前年比		
キ ク	白さび病	やや少	並	390~391	 オオタバコガ幼虫
	アザミウマ類	並	やや少	394~395	
	アブラムシ類	やや少	並	397~398	
	ハダニ類	少	並	396	
	ハモグリバエ類	やや少	並	399	
	チョウ目害虫	やや多	多	398~399	
	<p>1. アザミウマ類 一部圃場で発生が多い。本虫は、施設外から侵入し、施設内で増殖するため、施設内及びその周辺の雑草を除草するとともに、発生状況を随時確認し、低密度時からの防除を徹底する。</p> <p>2. チョウ目害虫 一部圃場で食害が多い。老齢幼虫には薬剤が効きにくいので、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。特に、オオタバコガは新芽や花蕾に食入し薬剤がかかりにくいので、よく観察して初期防除を徹底する。</p> <p>3. カメムシ類 多くの圃場でカスミカメ類による被害が発生している（下記写真参照）。本虫にキクが食害されると、葉に小さい穴があき、新芽が破れ、芯止まりや茎曲りを生じる。早期発見に努め初期防除を徹底する。</p>				
	 キクに寄生したカスミカメ類		 カスミカメ類に食害されたキク		
野菜・花き 共通	チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ) (オオタバコガ)	やや多	並	168, 170 仔ゴ : 217~219 ナ : 252~253 アハ : 321, 324 幼 : 398	<p>1. 老齢幼虫には薬剤が効きにくいので、早期発見に努め、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。特にオオタバコガは新芽や花蕾、果実に食入して薬剤がかかりにくくなるため、よく観察して初期防除を徹底する。</p> <p>2. 施設開口部に防虫ネットを被覆し、成虫の侵入を防止する。また、施設周縁部に遮断溝（中に水をためる）を設けて幼虫の侵入を防ぐ。</p> <p>3. 訪花昆虫を利用する場合には、薬剤の選択に注意する。</p>

注1) 病虫害名に網掛けをしたものについては、予報の根拠とした内容を記載しています。

注2) 予想発生量については、平年および前年との比較により記載しているため、実際の発生量とは相違を生じる場合があります。例えば、例年の発生量が少ない病虫害について「平年および前年より多い」と予想した場合であっても、実際の発生量は多くない場合があります。

注3) 防除対策については「[佐賀県病虫害防除のてびき](#)」も参照してください。

II. 予報の内容・根拠等について

予報内容（来月の予想発生量）

- 平年（過去 10 年間）及び前年と比較し「少、やや少、並、やや多、多」の 5 段階で示しています。
 なお、少発生が予想される病害虫等については、予報の概要のみの記載となる場合があります。

予報内容の根拠

- 農業技術防除センターが実施する県内各地での調査、防除員の調査、予察灯・トラップでの誘殺状況調査等に基づく発生現況、気象予報からみた病害虫の発生条件等を基に、関係者による発生予察会議で決定します。
- 発生現況および気象条件が来月の病害虫の発生に及ぼす影響については、(－)：少発生、(－～±)：やや少発生、(±)：並発生、(±～＋)：やや多発生、(＋)：多発生として示しています。

防除上注意すべき事項

- 各病害虫を防除する上で特に注意すべき事項等を記載しています。なお、全般的な防除対策については「県防除のてびき」をご参照ください（1 ページの予報の概要にリンク有り）。

写真

- 1 ページ目：予報で対象とした病害虫を抜粋して掲載しています。
 5 ページ目以降：巡回調査時の各作物の生育状況を掲載しています。

11月の気象条件

- 病害虫の発生に関与する 11月の気象条件については、福岡管区気象台発表の3ヶ月予報（平成 29 年 10 月 25 日）を基に、「気温：平年並」、「降水量：平年よりやや少ない」と判断しています。

気象予報による要素別確率(%)及び病害虫の発生に関与する気象条件

要素	3ヶ月予報における11月の気象予報（確率予報%）			病害虫の発生に関与する気象条件（平年比）
	低い(少ない)	平年並 (佐賀市の平年値)	高い(多い)	
気温	30	40 (12.9℃)	30	並
降水量	40	40 (75.9 mm)	20	やや少

Ⅲ. 11月の予報

オオムギ

1. 網斑病

1) 予報の内容

発生量：平年より少ない（前年より少ない）

2) 予報の根拠

(1) 29年産での発生の現況

①巡回調査(平成29年5月2～8日調査)

発生茎率：20.0%（平年78.1%、前年100%）

平年比：少く－ 前年比：少く－

3) 防除上注意すべき事項

(1) トリフミン水和剤あるいはヘルシードT水和剤による種子消毒を徹底する。

(2) その他については、特記事項（麦類全般）を参照。

2. オオムギ縞萎縮病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況（図1参照）

平成16年以降、発生面積は少なく推移している。〈一～±〉

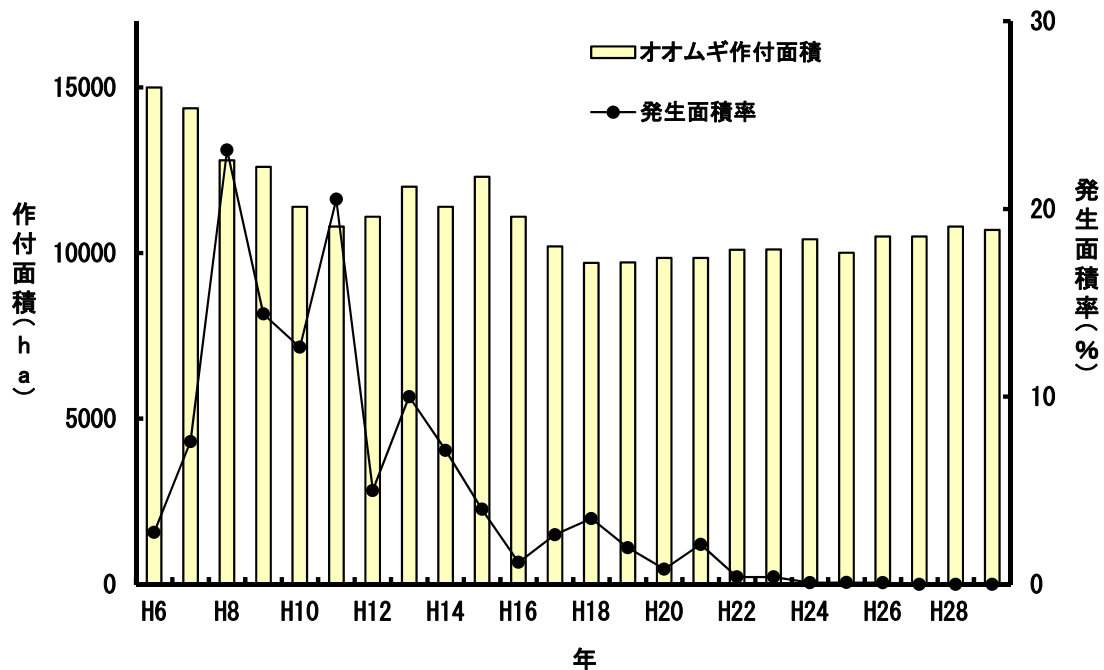


図1 オオムギ縞萎縮病の発生面積率の年次推移

コムギ

1. シロトビムシ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 29年産小麦での発生の現況（図1参照）

発生圃場率0.5%（平年4.3%、27年産1.4%）

平年比：やや少く（～±） 前年比：並く（±）

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 播種時期は遅くならないようにする。
- (2) 被害が多い圃場では、芽出し播きや芽出し乾燥播きを行う。
- (3) 被害が著しい圃場では、オオムギを作付けする。
- (4) その他防除対策については、特記事項を参照する。

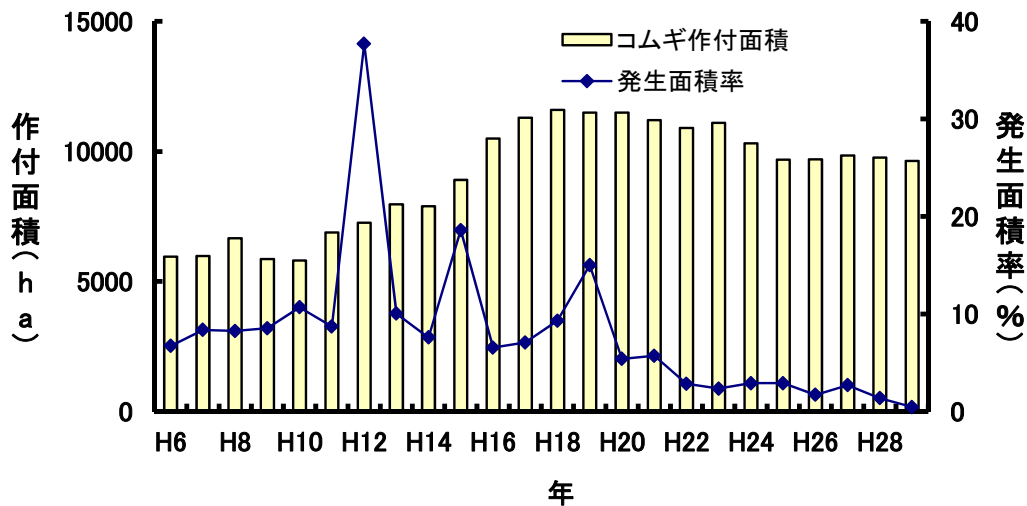


図1 シロトビムシ類のコムギでの発生面積率の年次推移

タマネギ

巡回調査（16圃場）

10月20～23日

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い（前年並）

【11月に発生する可能性は低いが、苗床での感染程度が平年に比べやや高いと考えられる】

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

発生株率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並く（±） 前年比：並く（±）

(2) 圃場の菌密度

前年の発生は平年並であったため、圃場の菌密度は平年並とみられる。（±）

(3) これまでの気象条件

佐賀市の9月の降雨日数は17日であり、卵胞子の感染に適した条件で経過した。（+）

(4) 11月の気象条件

降水量がやや少なく、やや少発生の条件（～±）



巡回調査の圃場の様子

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

2. ボトリチス葉枯症

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況（図1参照）

発生株率：0%（平年0%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：並（±）

(2) 11月の気象予報

降水量がやや少なく、やや少発生の条件（-〜±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 育苗期から防除を徹底する。

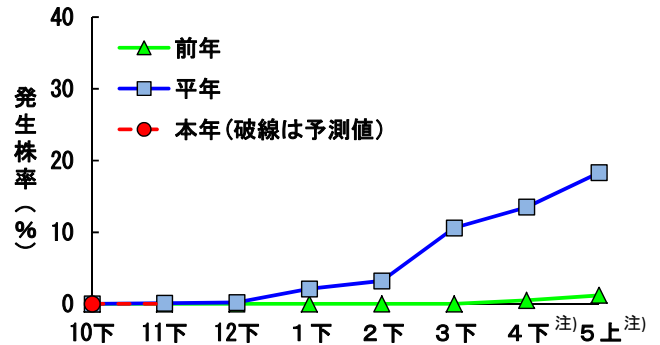


図1 タマネギボトリチス葉枯症の発生推移
注) 4月下旬以降は、中・晩生品種を中心に調査

3. ネギアザミウマ

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況（図1参照）

発生株率：0%（平年0.3%、前年0%）

平年比：やや少（-〜±） 前年比：並（±）

(2) 11月の気象予報

並発生の条件（±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 本圃へ本虫を持ち込まないように、苗床での防除を徹底する。

(2) 本虫は薬剤がかかりにくい葉の隙間に寄生しているので、薬剤のかけむらがないように散布する。

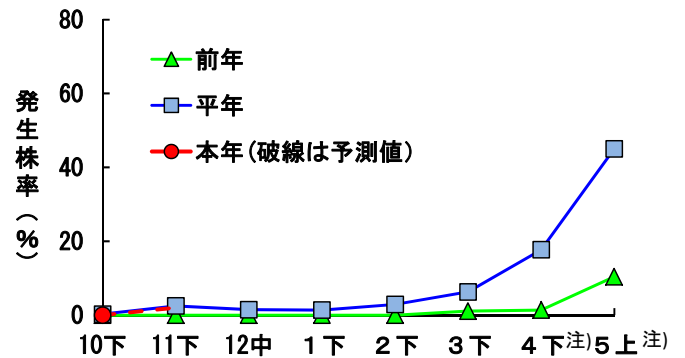


図1 ネギアザミウマのタマネギでの発生推移
注) 4月下旬以降は、中・晩生品種を中心に調査

イチゴ（本圃）

（巡回調査 11 圃場、防除員 4 圃場）

調査日：10月19日～23日



巡回調査圃場の様子

1. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：3.5%（平年4.5%、前年0%）

平年比：並（±） 前年比：やや多（±〜+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 圃場によって薬剤の感受性が異なるため、防除効果を確認しながら、防除薬剤を選定する。

(2) 同一系統の薬剤の使用回数が増えないよう注意する。

(3) その他については特記事項を参照。

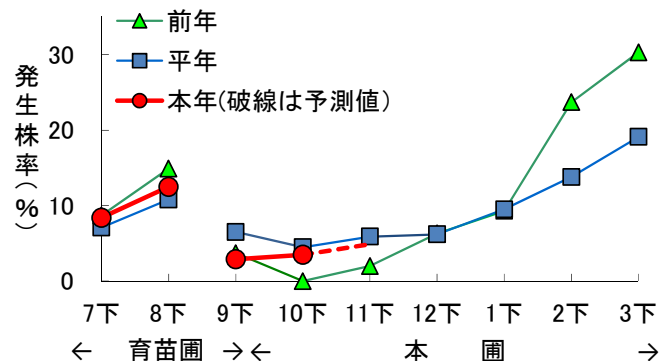


図1 ハダニ類のイチゴでの発生推移

2. うどんこ病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年並）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：2.1%（平年10.1%、前年2.7%）

平年比：やや少（一～±）

前年比：並（±）

(2) 11月の気象予報

降水量がやや少なく、やや少発生の条件（一～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 開花時の薬剤散布は、奇形果の発生が多くなるので避ける。

(2) その他については特記事項を参照。

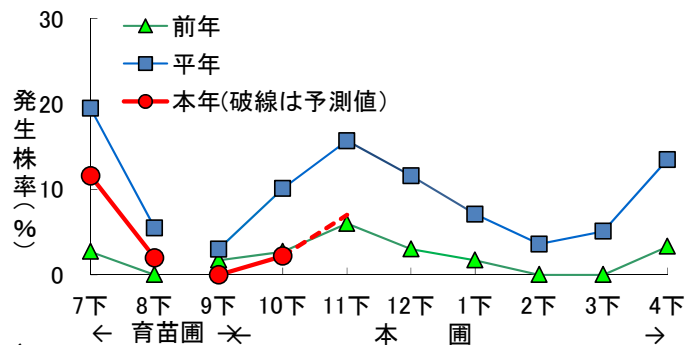


図1 イチゴうどんこ病の発生推移



巡回調査圃場の様子

キュウリ（抑制）

（巡回調査8圃場）

調査日：10月19日～23日

1. ベと病

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：7.9%（平年18.4%、前年22.9%）

平年比：やや少（一～±） 前年比：少（一）

(2) 11月の気象予報

降水量がやや少なく、やや少発生の条件（一～±）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 過湿とならないように、加温機を活用し、湿度低下に努める。

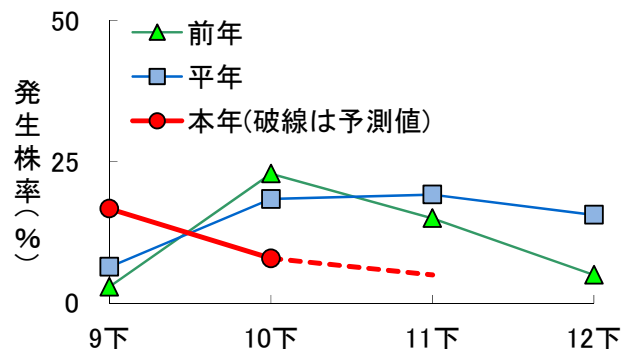


図1 キュウリべと病の発生推移

2. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年並（前年よりやや多い）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査（図1参照）

発生株率：4.3%（平年2.9%、前年2.1%）

平年比：やや多（±～+） 前年比：やや多（±～+）

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

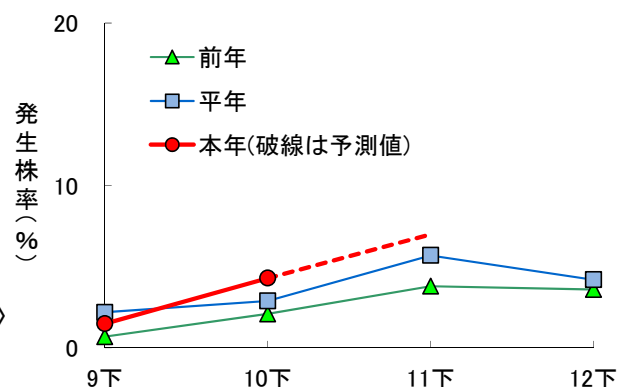


図1 アザミウマ類のキュウリでの発生推移

3. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや少ない（前年よりやや少ない）

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1 参照)

発生株率：1.4% (平年 12.2%、前年 6.4%)

平年比：やや少 (一～±) 前年比：並 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

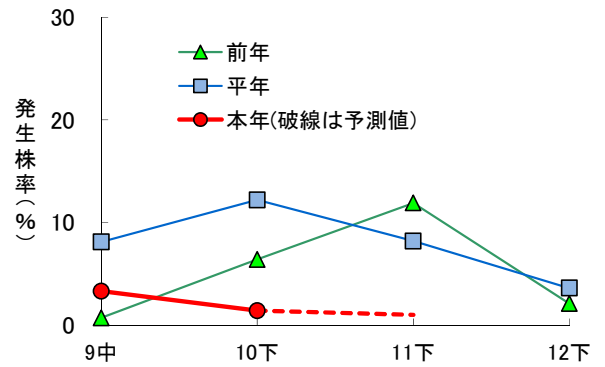


図1 コナジラミ類のキュウリでの発生推移

トマト

(巡回調査 8 圃場、防除員 4 圃場)

調査日：10月18日～23日



巡回調査圃場の様子

1. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1 参照)

発生株率：6.0% (平年 5.7%、前年 5.0%)

平年比：並 (±) 前年比：並 (±)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特記事項を参照。

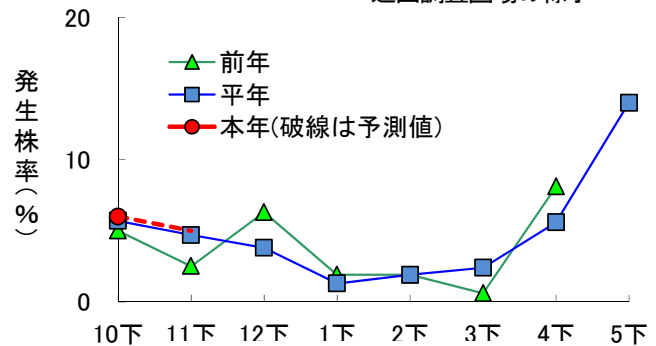


図1 コナジラミ類の圃場での発生推移

ナス (促成)

巡回調査 (7 圃場)、防除員調査 (4 圃場)

調査日：10月18～19日



巡回調査圃場の様子

1. アザミウマ類

1) 予報の内容

発生量：平年並 (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1 参照)

発生株率 17.9% (平年 23.6%、前年 28.6%)

平年比：並 (±) 前年比：やや少 (一～±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設開口部を防虫ネットで被覆し、ハウスへの侵入を防止する。
- (2) 葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。
- (3) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

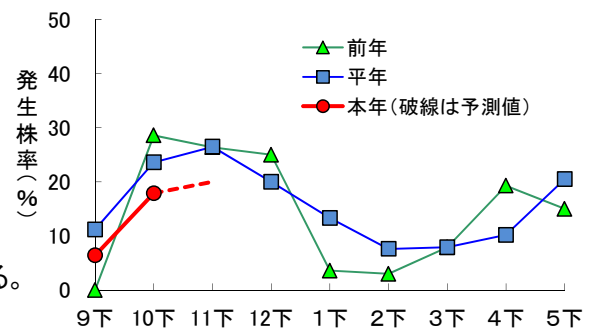


図1 アザミウマ類のナスでの発生推移

2. コナジラミ類

1) 予報の内容

発生量：平年並 (前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1 参照)

発生株率 52.1% (平年 51.8%、前年 47.9%)

平年比: 並(±) 前年比: 並(±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 葉裏や下位葉にも薬液が十分かかるよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。

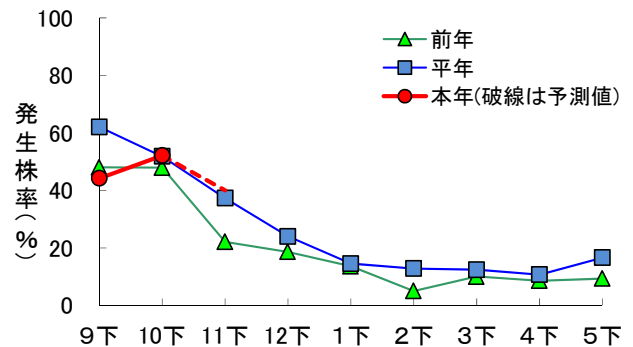


図1 コナジラミ類のナスでの発生推移



巡回調査圃場の様子

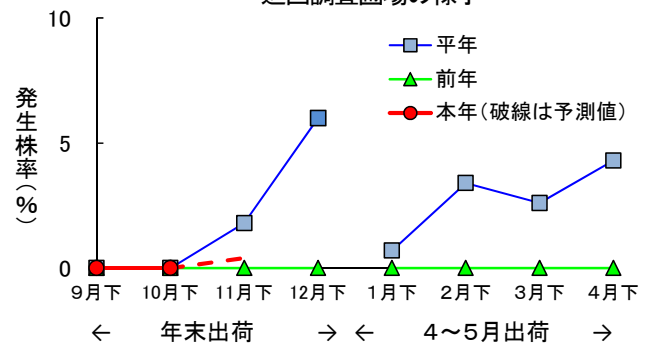


図1 キク白さび病の発生推移

キク

巡回調査 (8 圃場)

調査日: 10月18~20日

1. 白さび病

1) 予報の内容

発生量: 平年よりやや少ない (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1 参照)

発生株率 0% (平年 0%、前年 0%)

平年比: 並(±) 前年比: 並(±)

(2) 11月の気象予報

降水量がやや少なく、やや少発生の条件(一~±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 施設内が多湿にならないように適宜換気を図るとともに、発生前から薬剤を定期的に散布する。散布する際は、葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるように散布する。

2. アザミウマ類 (クロゲハナアザミウマ、ミナミキイロアザミウマ、

ミカンキイロアザミウマ)

1) 予報の内容

発生量: 平年並 (前年よりやや少ない)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1 参照)

発生株率 4.5% (平年 3.7%、前年 6.8%)

平年比: 並(±) 前年比: やや少(一~±)

3) 防除上注意すべき事項

- (1) クロゲハナアザミウマは葉裏に寄生していることが多いため、葉裏にも薬液がかかるよう丁寧に散布する。
- (2) ミカンキイロアザミウマは、キクえそ病・茎えそ病のウイルスを媒介するため、発生初期からの防除を徹底するとともに、発病株は早急に抜き取る。
- (3) その他については、特記事項を参照する。

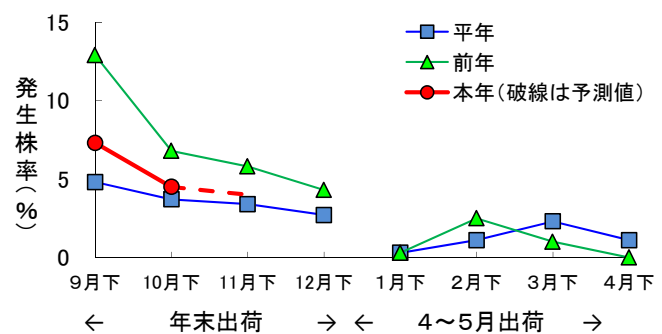


図1 アザミウマ類のキクでの発生推移

3. ハダニ類

1) 予報の内容

発生量: 平年より少ない (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査

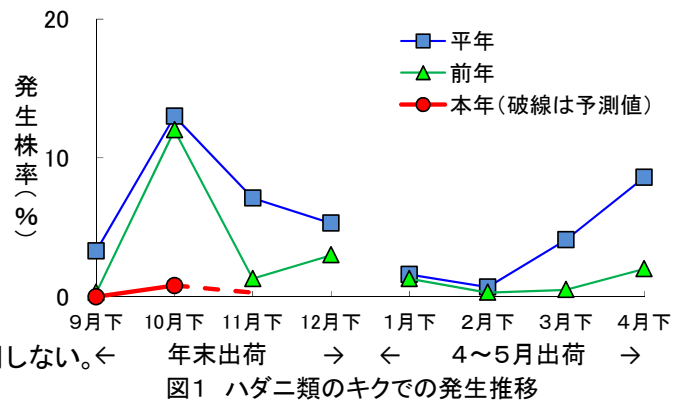
発生株率 0.8% (平年 13.0%、前年 12.0%)

平年比：少く(ー) 前年比：少く(ー)

3) 防除上注意すべき事項

(1) 葉裏や下位葉にも薬剤が十分かかるよう散布する。

(2) 薬剤感受性の低下を防ぐため、同一系統の薬剤を連用しない。←



4. チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ、オオタバコガ)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い (前年より多い)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1 参照)

被害株率 3.0% (平年 1.8%、前年 0.8%)

平年比：やや多(±~+) 前年比：やや多(±~+)

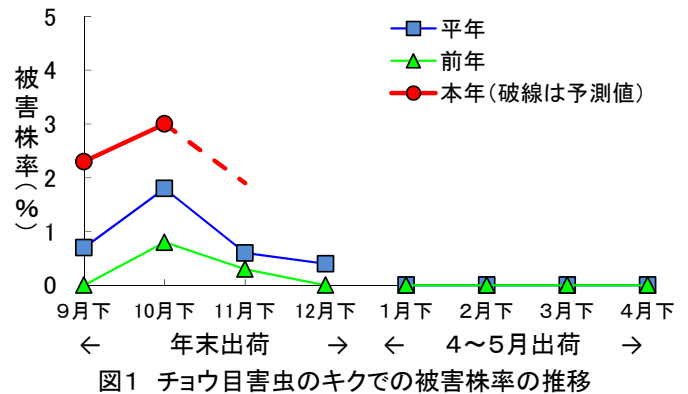
②フェロモントラップによる誘殺数

野菜・花き共通の項目参照 (P10)。<±~+>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 施設開口部に防虫ネット等を設置し、施設内への侵入を防止する。

(2) その他は特記事項を参照。



野菜・花き共通

1. チョウ目害虫 (ハスモンヨトウ、オオタバコガ)

1) 予報の内容

発生量：平年よりやや多い (前年並)

2) 予報の根拠

(1) 発生の現況

①巡回調査 (図1 参照)

イチゴにおける食害株率：11.5% (平年 7.2%、前年 10.3%)

平年比：やや多(±~+) 前年比：やや多(±~+)

アスパラガスにおける食害株率：0% (平年 0.8%、前年 0%)

平年比：並(±) 前年比：並(±)

ナスにおける食害株率：3.6% (平年 12.2%、前年 7.1%)

平年比：並(±) 前年比：並(±)

②フェロモントラップによるハスモンヨトウ及びオオタバコガの10月の誘殺数は、平年並~やや多く推移している (図3~4)。<±~+>

3) 防除上注意すべき事項

(1) 圃場毎の発生状況を確認し、本虫の若齢幼虫期に防除する。

(2) その他については特記事項を参照。

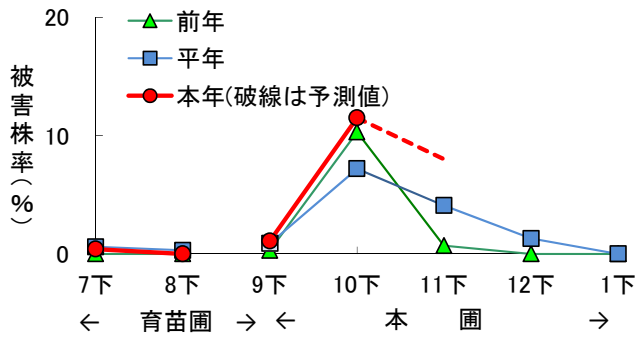


図1 イチゴでのチョウ目害虫による被害株率の推移

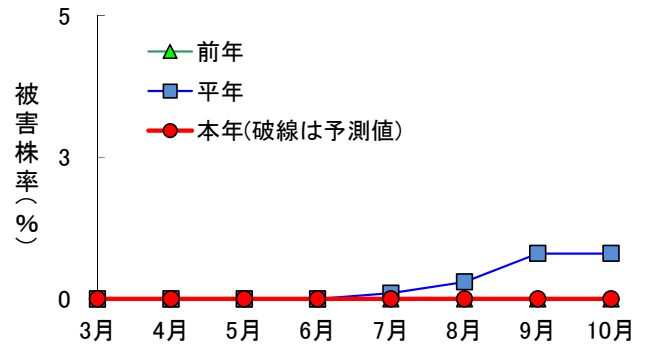


図2 アスパラガスでのチョウ目害虫による被害株率の推移

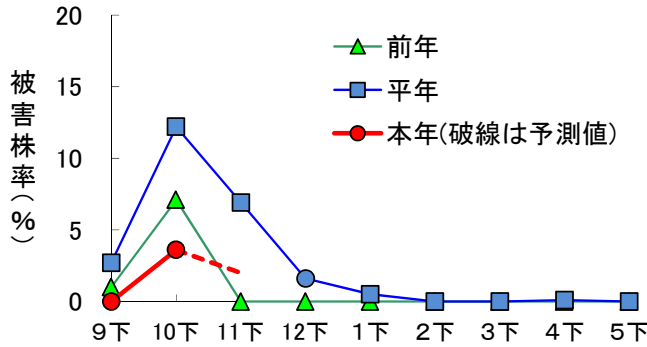


図3 ナスでのチョウ目害虫による被害株率の推移

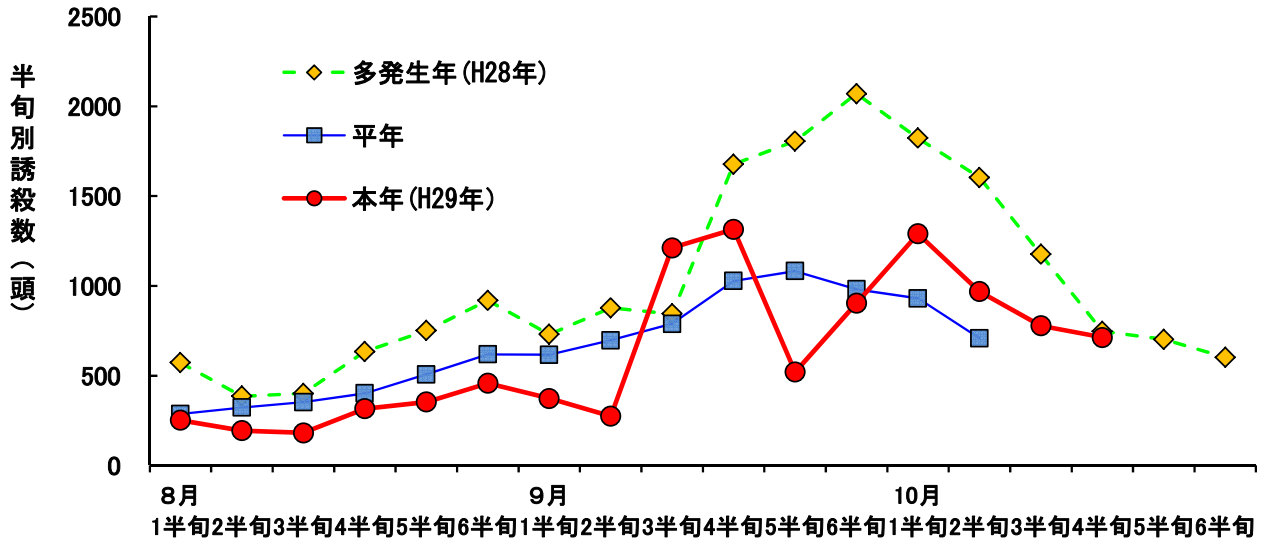


図4 フェロモントラップによるハスモンヨトウ雄成虫の半旬別誘殺数
(農業共済組合、農業試験研究センター、農業技術防除センターによる県内9地点の平均誘殺数。ただし、年によっては、8月2半旬頃から調査開始の地点がある。)

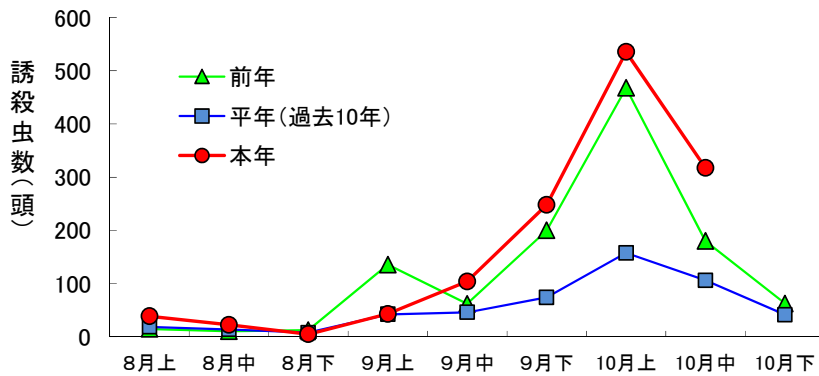


図5 フェロモントラップによるオオタバコガの半旬別誘殺数
(病害虫防除員による川副町2地点での平均誘殺数)

連絡先：佐賀県農業技術防除センター 病害虫防除部
〒840 - 2205 佐賀市川副町南里 1088
TEL (0952) 45 - 8153 FAX (0952) 45 - 5085
Mail nougyougi.jutsu@pref.saga.lg.jp